岡豊風日

〈高知県立歴史民俗資料館だより〉 第15号 1995年4月1日

土佐で初めてロボット人形やカラクリ時計を作った男 細川半蔵頼直

田中 瀧治

お客と対面した人形の手に茶碗を置くと頭をふりながら客の前に行く。客が茶碗をとると停止する。茶碗を手に戻すと一八〇度旋回して主人の所に帰り、茶碗を取ると停止する。摩訶不思議。

この様な数種類のロボット人形や、時至れば台上の鶏が鳴いて時を知らせる時計などが明和、安永の頃から寛政の初年にかけて、土佐の片田舎長岡郡西野地村上末松で作られた。この作者を人呼んでカラクリ半蔵という。兼山が創設した百人衆郷士の六代目。

現在半蔵の名前や業績を知る人は南国市でも少なく、県内よりも県外人に名を知られている特異な人物である。

半蔵の生涯は資料が少なく、自著の「機巧図彙、首・上・下」三巻三冊を寛政八年出版、この様な技術は一子相伝とか門外不出と言われた当時、貴重な技術の解説書を残して日本の科学技術を世界に示した著述として高く評価されている。しかし、生年も、何時誰に何を何処で習ったかなど不明な点の多い、特技をもった人物である。

湯浅常山の「文会雑記」岡本真古の「土佐奇人伝」等でその一端を知られるが天文暦学については半山の片岡直次郎に就いて学んだ等記されている。寛政三年大志をいだいて江戸に出て、同六年幕府暦作方五人の一員として参加したが同八年江戸で病没したとされている。岡本によると出府の節、村境の橋桁に「一に名を天下に揚げざれば復此橋を過ず」と記して旅立ったが、「錦を着ながら故郷に帰らざるは遺恨なれども朽ざるものは名か」と結ばれている。

半蔵の作品としては「機巧図彙」が残るだけで人形時計類、天文関係等確定しうるものは一品もない。

県立歴史民俗資料館が所蔵する「茶運人形」も立川昭二氏は寛政頃の作ではないかというが半蔵作の確証は無い。国立科学博物館の鈴木一義氏は「動力のゼンマイやその他二、三点の欠落はあるが復元はさほどむつかしくはない」といわれているので、一日も早く修復し完全な姿で陳列されることを希望する。

茶運人形（当館蔵）

最近では「機巧図彙」による複製品が各地で作られているが、五段返等のように水銀を使った作品もある。人形や時計を一々図面を引いて作った苦心の跡が文章の各所に出ているので半蔵が全部自作して「機巧図彙」を書いたものと思われる。また写天儀、「写天儀記」四巻、行程儀（万歩計のこと）も作ったと記されている。

南国市には半蔵の志を継ぎ、天保七年には後免の大津屋金蔵が七妖品玉人形を完成、明治以降には鈴江、協和外の農機、カシオの里帰り等、半蔵の精神が現在まで生きているが、二十一世紀にむけて優秀な科学技術者を育てる教育が必要だと思う。

山崎構成博士は「一子伝承の時代に秘伝が公開せられたのは正に革命的大事業で、我国の機械史玩具史の上でかけがえのない大資料である。細川半蔵先生の功績に惜しみない讃辞を贈りたい」と述べている。

企画展「おもちゃ―遊びのかたち―」

4月28日（金）～6月11日（日）
〈休館日　5月1・8・15・22・29日・6月5日（毎週月曜日）〉

全国各地の郷土玩具を城田政治氏のコレクションの中からご紹介します。また、「形代（かたしろ）・まじない・少女の夢」と題する人形のコーナーや、昔なつかしいメンコなどの「おもちゃの中のヒーローたち」のコーナーを設け、いろいろなおもちゃを展示します。

関連企画

子ども歴史教室

企画展「おもちゃ―遊びのかたち―」を見よう

5月13日（土）午前10時から

招猫　群馬県

郷土玩具・城田政治氏寄贈コレクションについて

中村　淳子

城田政治氏が魅せられた郷土玩具は、日本のそれぞれの土地で、土や紙、木などの素材をもとに作られたおもちゃでした。子どもの遊び道具として親が作ったり、土産ものとして職人や農家の人たちが副業で作ったりしました。また、願いごとを託すものとして神社で売られるものもありました。こうしたおもちゃは古くは中世や江戸時代、明治・大正のころからありましたが、「郷土玩具」という言葉自体は、昭和初期に一般化したものだそうです。

郷土玩具という言葉が定着していった背景には、郷土玩具を収集する気運の高まりがありました。セルロイドやブリキ、プラスチックといった新しい素材の、工業製品の玩具が主流になり、新しい生活習俗の波がおしよせて、古い生活習俗が急速に失われてゆくそのような時代を背景に、古くて鄙（ひな）びた郷土玩具の収集熱が高まったのです。

皮肉なようですが、かつての生活習俗や郷土玩具を失わせる要因ともなった新しい生活の波は、交通の発達をもたらし情報の入手を容易にし、郷土玩具の収集に拍車をかけたのでしょう。

また、人々のニーズに応じて新たに生みだされた玩具もありました。

郷土玩具の魅力のひとつは、その土地ごとの風土や生活を反映しているところでしょう。季節のまつりに結びついたものも多くあります。子どものすこやかな成長を願ってつくられる、病魔をはらう「ほうこうさん」などのように、まじないの玩具であったり、珍しい由来を持っているものもあります。城田氏ご自身は、昭和五四年に高知新聞に連載した『おもちゃ風土記』の中で「玩具というのは土地、土地の体臭のようなものがあるんですよ。その生まれた土地を踏み、製作者を訪ねて話を聞いてこそ収集にも味わいがあり、愛着もできるもの」と述べています。

城田政治氏は、郷土玩具の収集、研究家として県内外に知られ、ご自身の家を愛玩満堂と号していました。城田

ほうこうさん　香川県

氏の郷土玩具の収集は大正一〇（一九二一）年頃からはじまり、途中、戦災で収集品の大半を焼失してしまいましたが、戦後収集を再開し、この貴重なコレクションを形成したのです。郷土玩具にかける城田氏の情熱には、ただただ圧倒されます。

城田氏のコレクションは、昭和四五（一九七〇）年に城田氏から当館の前身、高知県立郷土文化会館に寄贈されたもので、現在は当館で保存し、有名な茶運人形をはじめとするその一部を常設展示しています。

城田氏のコレクションには、全国各地の代表的な郷土玩具が網羅的に収集されています。土人形ひとつとってみても、各地に影響を与えたという土人形の代表格、京都府の「伏見人形」にはじまり、東北の三大土人形のひとつに数えられる宮城県の「堤人形」、異国情緒をたたえた長崎県の「古賀人形」、彩色は淡く丸みを帯びて素朴な姿の福岡県の「赤坂人形」などなど、枚挙にいとまがありません。

各地の土人形

（奥左から）鯛抱童子　佐賀県弓野、
阿茶さん　長崎県古賀、峠童子　愛知県犬山、
乙姫様　山形県酒田
（手前左から）馬乗鎮台　富山県富山、
桃太郎　福井県敦賀、喜々猿　大阪府堺、
つればり　高知県、松茸乗　滋賀県小幡

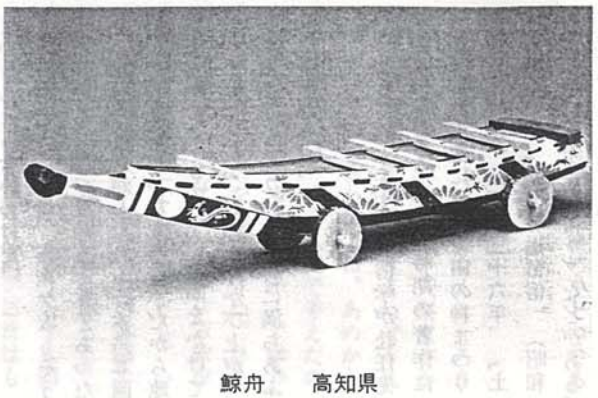
義太夫狐　福岡県赤坂

また、当然といえるのでしょうが、高知県の郷土玩具は特に充実しています。たとえば「鯨舟」は、かつて室戸の捕鯨の漁師が故郷に待つ子どもたちへの土産につくったのがはじまりといわれていますが、城田氏のコレクションの中には捕鯨の羽指（はざし）として活躍した松下駒弥太作や、その配下の岩下常之助作、また彼らの鯨舟を見習って新たに玩具づくりを行なった岡林藤吉作などが揃っています。玩具の鯨舟に多いのは勢子船を形どったもので、実物同様船体に色あざやかな模様が描かれています。こうした模様や船のかたちには、作者のそれぞれの個性が現れています。

また、城田氏のコレクションの中には「教育いろは組合せカード」のように、郷土玩具の範疇には入らないようなものもあります。その中にはゲーム盤の上で双葉機が飛行船を大砲の位置まで追い詰める「空中戦争」など、「軍国少年の尚武的玩具」という表現とあいまって、軍国調が盛り上がっていく時代の空気がうかがえる玩具もあります。

今回の企画展でご紹介するのは、城田氏のコレクションの、ごく一部ではありますが、城田氏が残してくださった珠玉の玩具たち――そのほのぼのとした愛らしさや素朴な美しさ、思わず笑みがこぼれるユーモラスな姿などを、この機会にぜひご覧ください。

※　※　※



鯨舟　高知県

ひと 4

高木 啓夫 先生

今回の「ひと」は、『本川村史』第3巻の発刊を目前に控えた高木先生にこれまでのご研究の歩みを振り返って頂いた。

平成元年に発行された第2巻でも高木先生は中心になって執筆し、山中正義さん所蔵の資料（当館寄託）を軸に、中世から現代に至る本川村の信仰世界を民間宗教者の資料をもとに明らかにされた。今回の第3巻は、その資料の翻刻と解説を中心にしたもので、この種の内容のものとしてはこれまでは広島県の『中国地方神楽祭文集』があるくらいで、全国的にみても先駆的な研究となることは間違いない。

民間宗教者の資料は、宗教者自体が少なくなってきた今、その信仰を解明するために重要なものだが、文字を嫌う民俗学からは無視され、経済史学の立場からは排除されてきた。最も関係の深い芸能史や宗教史の側からも、資料の分析が始まったのはつい最近のことである。

高木先生は早くから神楽研究の上で文字資料に着目され、大きな成果をあげてこられた。これは、民俗学者が祭りは見ても、その背後にある文献や資料をあまり見ないことに比べると大きな違いである。民俗学では、柳田国男の提唱以来、文字や文献を重視しない風潮が強くあった（最近はまた変わってきたが）。高木先生はどこで文字資料重視の考え方を身につけられたのだろうか。

「民俗学をやるには、聞くだけではなくて古文書を読めなくてはいかん、という考えは大学に入る前からあった。民俗を調べ歩くのはいつでもどこでも行けるけれど、史料を読む基本の力、古文を読む力が無いとやがては行き詰まると思って、大学でも、国文でもまだ基礎になる文法の方をやった。

高知へ帰って本格的に調査を始めたときも、民家へ行くとやっぱり古文書や筆で書いた覚書のようなものがあった。ところが一番最初につまずいたのは、やっぱり古文書が読めないことよね。あ、こりゃ文法やるより史学行った方が良かったかな、と思ったのはその時だった。それからはテキストを手に入れ、自己流の勉強をやった。」

高木先生は、はじめから古文書を重視する考えをおもちだったようだ。その姿勢は『土佐の祭り』（市民図書館）や『いざなぎ流御祈禱』（物部村）でも一貫しており、本文に匹敵する分量の資料翻刻が理論をがっちり支えているのはご承知の通りである。

高木先生の民俗学の特徴としてもうひとつあげられるのは、地域に密着した研究であるということだろう。高木先生が民俗学を志して高知県に帰ってきた昭和三十年代初頭は、まだまだ高知には情報が入ってこない時代であった。そのとき高木先生は、情報量の少ない高知で中央に対抗しうるような研究を行うには、地域を限定した研究しかない、と考えた。地域民俗学ということばが高木先生の頭に浮かんできたのはそのときだった。

「高知県なら高知県、室戸なら室戸、その土地であるが故に、特徴として浮き上がって来る民俗というのが必ずあるはずだ。どうしても全ての結論を中央の民俗学に結び付ける必要はないわけで、中央ではこうである、富山ではこうである、北海道ではこうであるけれども、土佐ではこうであるという、土佐の自然と風土のなかで成り立ってきた特性が必ずある。それを明らかにして問題点を浮かび上がらせることがすなわち地域民俗学であろう、と。そうなれば中央の資料を恋い焦がれて、中央からの手紙が来ずに悲嘆に暮れるということもないわけだ。

僕らの若いころは、布施ケ坂もそうであったし、四つ足峠もそうであったが、峠をひとつ越したらもう本当雰囲気がぐっと変わったものだ。だから地域民俗学というのは、時間をかけてじっくりやれば、自然と浮かび上がって来るようなそういう資料に満ちあふれた時代だった。」

こうして高木先生の民俗学が赴任先の幡多で始まる。この時期の著作に「幡多郡西南部における田の神まつりの様式と変遷」（昭和三十六年、『土佐史談』）、「幡多葬送習俗」（昭和四十二年、『土佐民俗』）などがある。

「学生のときから、神の去来や、人の魂というのは一体どうなるのかなあということが僕の頭の中に大きく宿っておった。オサバイさん（田の神）が山から田に降りて来るということを本で読み大学でも話を聞かされていたところ、宿毛に行くと、ちょうど四月から五月にかけて田植えの時期でオサバイさんをまつっている。それで最初にやったのが田の神の報告じゃね。

オサバイさんやりながら、やっぱり人間の方の魂はどうなるかと思って葬式をやり出した。あの頃葬式で書いたのがぼちぼちあるわね。ほんであれは、しばらくよう忘れんかったけど、西土佐で相変わらず葬式の話を聞きに行ったとき、とある家に入ったところがおばあさんがおって、そのおばあさんに話を聞きよったら、話しながら「実は私の主人も死んだばっかしでね。」と言われた。それから僕は葬式やめたです。人の魂が葬式の中でどういうふうに見られているかというのは今も興味をもっとることですけど、あれ以来、そんなにまでして亡くなった人のところに行って人の魂がどうじゃこうじゃいうことをもう調べんでもいい、そのままの方がやっぱりえいんじゃないかと思って…。それ以来葬式はやめました。」

人間の研究であるがゆえに、人の心の痛みにじかに接してしまうこともある、民俗学の方法自体が内包する辛さ。高木先生の研究は、神楽の方へ進みはじめる。幡多の秋祭りを見て歩くなか、不破八幡宮や宿毛市山田の平田のお祭りに神楽があることを知った。たずねてみると地元の神楽ではなく、十和村の十川から来ているということである。しかし、調査を始めるまで間があった。

「当時は四万十川を遡って十和村行こうなんて大変なことで、一年か二年か三年かしばらく間があった。あるとき思いたって小さなバスで江川崎まで行ってそこで一泊して、それから十和へ行った。それが神楽の調べ始めよ。」

そのとき以来、高木先生の神楽研究が始まる。当時は県内にどういう神楽があるかということもわかっておらず、まさに手探りの調査であった。

「土日になったら神楽の面はありませんかありませんか、と行ったもんよ。名野川なんかは当時は知られざる神楽じゃったし、大正町でもやっておったと聞いた。仁淀村でも昔やっておったというたが、僕が行ったときは、やっておったということはわかるけれども、それがどこでどうやってきたかというのはもうわからなかった。同じ事は吾北村でもあった。ぼくが行ったのは、神楽をやっておった岡林さんという人が亡くなった直後で、ああしまったなあ、と、悔いたこと。今でも悔いているけれども、もうちょっと早ければ…。どこもかしこも全部早けりゃ良かったけれどね（笑）。結局神楽があることがわかりながら全容がまったくつかめないのがその二つよね。」

現在土佐には、十和、津野山、名野川、池川、安居、本川、岩原永淵、いざなぎ流などいくつかの神楽が知られているが、その中には高木先生の調査で広く世間に紹介された神楽も多かった。また、先生の働きが無かったら現在消滅している神楽はもっと多かったであろう。

次に個々の神楽についての各論に入っていこうと思い出したころ太夫さんの代が変わった。先生の習った太夫さんがみな亡くなられてしまったのである。「あの時代の太夫さんはよう知っとった」と高木先生は回顧する。

「人間の知恵を信じたい」と先生は続ける。複雑な宗教体系も民具も人間の知恵の産物である。その知恵の発露に先生は大きな感動を覚える。次に集大成を狙いざなぎ流にしても、人間の生み出した知恵の集積のひとつである。

「誰があんなこと考えたんじゃろうね。七大祭文というか、十大祭文がからまりからまっておるわけよね。それへ枝がこう出とるわけよね。あのからまりというのは一人の人間で考えたのか、複数の人間で考えたのか…。作った人間を僕は偉いなあと思うね。ひとつの流派だけでなくいろんな宗教が入ったということでしょうけども、いろんな宗教をああいうひとつの体系の中に組み込んで、独自の複合体としてものを作り出していく、そういう人間というのは偉いと思うなあ。これはもう優れた思想家やね。」

人間の知恵に対する掛値なしの称賛、これこそが高木民俗学の根幹にある人間賛歌である。しかし、その人間の知恵は今、失われようとしている。

「語りべのいなくなった現在、従来のような民俗学という方法がなりたつかどうか、二十一世紀からの民俗学をどう攻めていくか、それが今の悩みの種よ。」

それは、私たちの課題でもある。

（文責　梅野）

〈研究ノート〉

西南戦争勃発時の立志社挙兵計画について

下村　公彦

明治十年（一八七七）二月、西郷隆盛を担ぐ一万三千の私学校党軍が鹿児島を進発、九州各地の反政府士族を糾合して熊本城を攻撃した。しかし、翌月には人員・火力に勝る政府軍が田原坂を制した。ために西郷軍は、四月十五日熊本城包囲を解いて退却、人吉に入った。六月には同地も陥落し、その後敗走を続けた西郷は、九月二十四日鹿児島の城山にて最後を遂げた。

この西南戦争に際し、土佐の立志社員も少なからず動揺した。当時の状況について、『自由党史』は次のように述べている。

土佐に在て片岡等が板垣を中心とし、何處迄も国会論によりて天下の輿論を喚起し、以て事を成さんとすると同時に、東京に在ては林有造等、後藤と通同し、兵力を用いて政府を顚覆するの策を講じ、当時の立志社は勢二派に分れたり。而して是年二月西南の変発するに乗じ林は竊かに挙兵の準備に着手し、月を逐ふて計頗る熟す。銃器数千挺を上海に取り、即ち一方に刺客を放て廷臣を屠戮すると倶に、自ら死士八百を率いて大坂城の虚をつき、併せて一時に土佐及び紀伊其他各地と相呼応して暴起し、以て大事を挙げんとする……

この挙兵計画について、外崎光広氏は、「そのような画策をしたのは林有造その他の東京・京都・大阪等県外に在住し、行動していた立志社員であって、板垣を頂点とする土佐在住の立志社員の挙兵行動は見当たらない。」（同氏著『土佐の自由民権』）とし、銃器購入費に立志社が政府に売却する山林代金をもって充てようとする策などは「児戯に等しい」と評価された。

一方、福地惇氏は、「立志社の運動方針、政治的選択肢は単純ではなかった。そして、当然のこととして政治状況の変化に応じて運動方針は変化した。」（「立志社の挙兵計画について」―『日本歴史』第五三一号）との視点から、土佐在住の立志社員広瀬為興の回想録『明治十年西南の戦役―立志社挙兵計画の真相』の記述を支持して、「三月一日、立志社首脳が挙兵方針を決定した」とされ、また、それは単なる西南軍への「呼応」ではなかった点にも言及された。

私見では、両説の最大の相違点は、板垣ら「土佐派」の首脳が挙兵計画を立志社の方針として決定していたのか否かという点にあると思う。福地氏は、西郷軍の劣勢が明らかになる四月十五日の前の段階では、挙兵策は「立志社の最高意志」として決定されていたとされ、外崎氏の方は、これをあくまで林有造らの一部の突出計画であったとされる。（四月十五日以降については、両氏とも在高知の立志社幹部に挙兵の意志はありえなかったという見解でほぼ一致しているように思う。）

当事者たる林は、勿論挙兵計画が立志社の「社議」であったと次の如く力説している。（『林有造自歴談』）

三月一日午前立志社楼ニ会ス、谷重喜、片岡健吉、山田平左衛門、（中略）、広瀬為興氏ナリ、予ハ西国ノ勢ヨリ京阪ノ模様又東京ニ於テ銃器ノ着手ノ次第ヲ語ル、一同異議ナシ、晩ニ至リ板垣氏帰ル、諸氏皆板垣氏ニ会シ社議一決ス、……

私も、この時点での「社議一決」は事実だったのではないかと思う。ただし、その挙兵の時期は、「林氏カ上海ニテ葡人ヨリ取寄スル独銃スナイドル弐千挺積載着船ノ報近キニアルヲ期シ、此着船ヲ俟チ断行」（広瀬前掲書）というものであったことにも注目したい。結果からいうと「此着船」はなかった。銃器調達資金を山林代金として政府から引き出そうとする林の計画には無理があった。林は実現可能と踏んでいたようだが、果して他の立志社幹部はどうであったか。「着船」待ちという条件が付いていたが故に「社議一決」となったのではないか。板垣らは、この時挙兵と国会開設建白との両方にかけて進路を探っていたとも考えられる。

林は、三月二十日に高知を発ち上京する。その途中、大阪で同志の大江卓と会った時、彼は「土佐ハ迚モ銃器ナクテハ纏ラス故ニ此度東行」（『林有造自歴談』、傍点筆者）と告白している。そして、「東行」の成果はなかった。四月十五日、「熊本城連絡」の報を彼は東京で聞いた。以後も、彼は挙兵工作をあきらめない。

六月、立志社総代片岡健吉は、京都行在所に赴き、国会開設・地租軽減・不平等条約改正等の諸要求をもり込んだ建白書を提出した。立志社は、士族反乱でなく民権運動の道を選択した。この選択は、立志社首脳の既定方針によるものであったのか、それとも結果としての選択であったのだろうか。いずれにせよ、彼らは「挙兵」と「建白」との間に、現在の我々が感ずるほどの「差」を感じてはいなかったのではないかと思われる。

企画コーナー

吉本一族と吉本家資料

野本　亮

吉本氏族譜によれば、吉本家の始祖彦五郎は長宗我部元親の甥吉良親実に仕え、吾川郡仲村郷喜津賀東分芳原村を本貫地とした。地検帳には、一筆だけ（藤崎山添南ヱカキニ入　吉本彦五郎給、一、壱反拾代　出八代弐歩中　同　し）とある。

山内氏入国に伴い庄屋となり、土木作業の人夫募集や火薬の製造等に従事した。二世興大夫以降二家に分裂し、養子縁組を繰り返すが、代々有能な人材を輩出し、各地の庄屋を務めた。中でも四世の虫雄（外市）は、神学・儒学・天文学、さらには和歌・書道・剣道等にも秀で、芳原村（現春野町）の庄屋として抜群の功績をあげた。（彼の庄屋就任は、師谷真潮の推挙によるという）

幕末には浦戸庄屋として活躍し、国主拝謁の格を賜った分家五世の培根、清岡道之助らの野根山屯集に加わり斬首された子の培助などが出ている。また、明治期には、高知県庁収税属の本家七世久之、和歌山県庁二等属官の八世久壽（両名とも地租改正業務担当）、帝国陸軍歩兵大尉の九世久暢と続くが、日露戦争において久暢が戦死したため、中川家より養子を得ている。他にも一族の中には、高知県内の区長や警視官（佐賀の乱、西南戦争に従軍）を務めた者もおり、一族のほとんどが官僚や軍人として奉職している。吉本家は虫雄以降何度か困窮することもあったが、谷家の学風を守りよく家を保ってきた。

今回寄贈していただいた資料は、養子として家を継いだ中川（吉本）里兄に相伝されたもので、藩政期のものは少ない。

○展示資料一覧

・吉本氏族譜／私家祭儀式
　吉本正寛・香贄・元助著
・吉本族譜（弘化三年七月一八日）
　吉本年福著
・大機大用之剣術を得る工夫
　吉本虫雄識
・本流工夫書（真心陰流）
・辞令　高知県御用係収税属
　吉本久之
・昇任辞令　帝国陸軍歩兵中尉
　吉本久暢
・雇用証書　山内家家職（会計係）
　吉本里兄
・下村可成書簡（明治一〇年九月一四日　吉本久壽宛）

本棚

「盗みの文化誌」

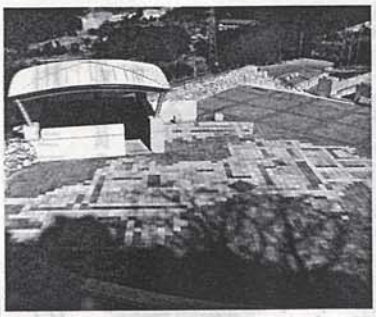
泥棒研究会著（青弓社　二〇六〇円）

昨年の今頃、地方新聞としては珍しい企画が高知新聞の学芸欄に連載された。驚いたことに表題にある通り「盗み」をテーマにした連載で、執筆者は「泥棒研究会」というグループであった。ところが、内容自体はバラエティに富み、ルパンと鼠小僧の東西比較をはじめ、中国の死体の話や西洋の骨泥棒の話、盗みの道徳観念の話などどれも興味深い内容で二度驚いた。そして、連載が終わって正体を明かした泥棒研究会の面々が、いずれも高知大学の教授助教授陣であることがわかって三度驚くことになった。

その連載が青弓社から単行本として発売された。その中には高知の事例を多く用いている吉成直樹氏の「作物盗みのフォークロア」も含まれている。

八月十五夜に他人の畑で作物や成り物を盗んでよいという習俗が高知県をはじめ日本全国に広く分布している。なぜこの日に限って盗みが認められるのか。吉成氏は、七夕の盗み、「木守り」や贈答のトミを巡る習俗、エビス盗みなど豊富な民俗例を引きながら、盗みが、盗まれる側にとっても盗む側にとっても、神の意志の現れとして考えられていたことを明らかにしていく。

一見奇異でバラバラにみえる習俗の中に一貫した思考を発見する、人類学的な思考法の魅力がよくわかる論文であるといえるだろう。（梅野光興）



歴民スポット⑤
テラスの巨大な地図

歴民館の正面玄関前の階段を昇ってみましょう。階段を昇りきって後ろをふり返ってみて下さい。そして、さっきまで立っていたテラス（玄関前の広場）を見てごらん。四国の地図が見えませんか。西に「ASHIZURIMISAKI」、東に「MUROTOMISAKI」、中央部に「KATURAHAMA」と刻んだ石のブロックがはめこまれています。中央部の小高くなったところは岡豊山を表わしています。

4～6月の催し物

〔企画展〕

4.28～6.11	おもちゃ－遊びのかたち－	城田政治氏コレクションの郷土玩具や竹とんぼや面子などのなつかしいおもちゃを展示します。

〔子ども歴史教室〕

5.13(土)	企画展「おもちゃ－遊びのかたち－」を見よう	AM10時　体験学習室集合。おもちゃ展を見ながら昔のおもちゃについて学習します。（当日受付）
6.10(土)	服のうつりかわり	AM10時　体験学習室集合。大むかしから現代までの服の歴史について展示を見ながら学習します。（要電話予約）

〔史跡巡り〕　（申込要）

5.20(土)	南国市の史跡巡り	南国市内の史跡（小蓮古墳・伝長宗我部家歴代の墓・国分寺・比江廃寺・細勝寺など）を巡ります。

〔企画コーナー〕

4.16～	戦時資料(1)	戦後50年にちなんで、学徒動員や女子青年団に関する資料を展示します。

4月1日から高校生以下の入館料が無料になります。

大人（18才以上）400円

市川泰三さんをしのぶ

資料調査員の市川泰三さんが、平成七年一月三〇日に幽冥界に旅立たれた。八十六歳であった。

市川さんは、二年ほど前突然歴民にやって来られた。同郷（窪川町七里）の岡本主事（当時）を訪ねて来られたのであった。話は葬式のことになり、市川さんはくわしく教えて下さった。話は尽きず、後日文章にして送って頂くことになった。二、三日後詳細かつユニークな文体のレポートが届き、その密度に私たちは舌を巻いた。こうして市川さんに資料調査員をお願いすることになった。謝金を振り込んで後の手紙には「芋ケンピしか食えない身が本物のケンピ（県費）を頂けた」とあった。

やがて市川さんが民具の収集家で、自宅がさながら博物館であること、熱心な郷土史家であることがわかってきた。遺稿の中には「災害史・地震編」、「同・洪水編」など未来の人々に伝えておこうという願いのこもった原稿も多かった。

何だか市川さんが亡くなられたという実感がない。葬儀に集まった人も「何だか泰やんが死んだような気がせんねえ」と言っていた。市川さんは「自転車屋の泰やん」として七里の人に親しまれていたのである。またはじめの時のように、突然歴民に姿を見せて快活な笑いを聞かせてくれそうな、そんな気がする。

〈歴民館日録〉

月日	出来事
平成七年	
一月八日	史跡巡り「北川村のお弓祭り」
一月一四日	講座「墓の考古学・1」
一月二四日～	企画コーナー「吉本家資料」
二月一一日	企画展「土佐・維新の書」開幕
	子ども歴史教室「火の昔むかし」
二月四日	史跡巡り「公家大名一条氏の足跡をたどる」
二月一一日	子ども歴史教室「白をひこう」
二月一八日	講座「長宗我部地検帳を繙く」
三月二六日	企画展閉幕

〈ひとこと〉

城田政治氏の郷土玩具の目録を作成中です。（中村）

最近資料調査員の馬場氏に貴重な戦時資料をご寄贈いただきました。常設展企画コーナーにて展示します。（野本）

週休二日の拡大で余暇が増えてきました。歴民など文化施設を積極的にご活用ください。（曽我）

平成七年四月一日
編集・発行　高知県立歴史民俗資料館
〒783 南国市岡豊町八幡1099－1
TEL　0888(62)2211
FAX　0888(62)2110
開館時間　午前9時～午後5時
（入館は午後4時30分まで）
休館日　毎週月曜日（祝日及び振替休日にあたる場合は火曜日）12月28日～1月4日
入館料　大人（18才以上）400円
（高校生以下は無料）
団体（20人以上）320円
療育手帳・身体障害者（1・2級）手帳所持者とその介護者、高知県長寿手帳所持者は無料。
印刷・川北印刷株式会社